

「望岳都（ぼうがくと）」というのは、「山嶺がよく望める都市」という意味です。関東平野の南東端に位置し、周囲を山に囲まれた東京は、まさに「望岳都」と言えます。この語を最初に使ったのは、小暮理太郎でしょう。小暮は、明治から昭和にかけて活躍した登山家で、その著書的一篇「望岳都東京」の中で、東京都内（当時は東京市内）から見える山の「山座同定」を徹底的に研究して紹介しています。

小暮の観察によれば、東京市内から見える 2,000M を越える山は、実に 60 座もあったと記されています。観察した場所の詳細も記されていて、当時日本一の高塔だった「凌雲閣（関東大震災で崩落）」に加え、赤羽台、田端、駿河台、本郷元町台などの、地上の高台からも観望できたことがわかります。高い建物がほとんどなかった明治から大正の東京では、地上からでも容易に遠くの山嶺を見ることができたのです。日本橋の橋の上から「雲取山（東京都最高峰）」が見えたというから驚きです。

しかし、今の東京は高層ビルやマンションが林立し、地上からは望外で、建物の屋上に行っても、見える山はわずかになってしまいました。お茶の水女子大学文教育学部1号館屋上からも山は見えますが、やはりわずかです。富士山を期待していたのですが、山頂は大きなビルに完全に隠されて、両側の裾だけが見えていました。

(2024年11月下旬／お茶の水女子大学構内)

